

## 葉集を読む

松岡 隆子

かいつぶり波間の数の定まらず

宮崎美智子

鳩はふつう湖や池や河川などに生息し四季を通じて見られる。冬に海上で見られるのは冬鳥の羽白鳩や赤襟鳩である。冬の海は荒波が立つことが多い。小さな鳩は波間に沈んで一瞬見えなくなることがある。波間に浮き沈みする鳩を数えるのは容易ではなさそうだ。的確な描写によって揺るぎない写生句となっている。滑らかな文体がこころよい。

猫にこゑかけて街行く小六月

高野 達子

小春日和の街を歩く。春のような暖かい日差しに塞ぎがちだった心が晴れ足取りも浮き立ってくる。向うから猫がのこと歩み寄ってきた。声をかけるとニャーアと眠そうな声で鳴いた。小六月の街の心と光景だ。

気の急いで病院遠き夕時雨

堀 真智子

弟さんが緊急入院したという知らせに、堀さんは慌てて病院に駆けつける。折からの時雨で道路は見通しが悪い。逸る

気持ちを抑えてハンドルを握る。いつもの道が途方もなく遠く感じられる。心配で胸がつぶれそうな心境が伝わってくる。

年の瀬の古りて大きな旅靴

芝 京子

芝さんは昨年12月に句集『朴青葉』を上梓された。句集の前段には〈はまなすや車窓に沿へるオホーツク〉〈滝少し右に揺れたり那智の山〉〈最上川濁りて曲る合歓の花〉など数々旅吟が見られる。大きな旅靴には旅の思い出がたくさん詰まっている。もう使うことはないだろうと思っても捨てる気にはなれない。思い出は大切に仕舞っておこう。靴をそつと押し入れに戻す。かくして年末の大掃除はなかなか片付かないのであった。

たわいなきこと言ひ山茶花の小径

渡部 順子

特に何を話すでもなくとりとめもない話をしながら山茶花の小径を歩く二人。二人の関係も人物像も皆目わからないが、それはそれでよいと思う。なんとも軽妙な破調のリズム感を味わいたい。一人なら歌でも口ずさみたくなるような山茶花日和だったに相違ない。

寄鍋の焦げの頑固に残りたる

見上 恵

寒い冬の夜は鍋物がいちばんだ。煮汁に肉や魚介や野菜、豆腐などを入れて煮えるのを待つだけ。食材を盛っておけばあとは鍋奉行なる者が取り仕切ってくれるので助かる。だが